【259】

氏名	椋本　勤（むくもと　つとむ）
学位の種類	農学博士
学位記番号	論農博第255号
学位授与の日付	昭和45年1月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**Agricultural Machinery and Mechanization in Japan** （日本における農業機械と農業機械化）
論文調査委員	（主査）教授 増田正三　教授 川村　登　教授 三橋時雄

論文内容の要旨

本論文の第Ⅰ編においては農機具の発達過程を，いまから約100年前にさかのぼり，以来1956年ころまでを四期に分けて詳述しているが，単に年代順の発達史を羅列したものではなく，わが国の基幹作目である水稲に必要な農機具について，技術的ならびに経営上の観点から考察を加え，とくに小型二輪トラクター利用における経費分析を行なっている。ほ場作業には手農具が多く使われ，畜力はわずかに運搬・代かき作業のみに利用されただけで，欧米におけるように畜力時代を経ることなく，第二次大戦後は動力耕うん機の普及が急速に広がった。

一方，調製加工機は第一次大戦後，石油発動機と電動機とが初めて国産化されて以来，次第に普及をみるようになり，ほ場作業機の立ち遅れに対して跛行的な発達の様相を呈したと言える。

第二編において戦後しばらくしてから，わが国の工業が急速に発達したことに伴ない，農業人口が減少したことに基づいて，機械化がますます加速されて行く必然性を述べ，小型トラクター農業が次第に大型機械を採用した形態に移行しつつある状態を理論的に，また統計的に説明している。

論文審査の結果の要旨

本論文は数多い文献の調査に基づいて，わが国の農機具の発達史を詳しく述べている。明治時代から大正の中期までは諸外国との交流がありながら，わが国の基幹作目が水稲であること，および封建的な地主制度などの理由で機械化が見送られ，もっぱら人力作業に依存して来た。一方，石油発動機と電動機が国産化されるようになってから，これらはまず調製加工機の原動機として用いられたため，立ち遅れたほ場作業の機械化に対比して，調製加工機のみが機械化されるに至った経緯を明らかにしている。

第二次大戦後の農地改革による地主制度の崩壊と，急速に発達した工業が農業人口を吸収したため，これに伴なって農業機械化が必然的に行なわれざるをえない状態を理論的・統計的に記述した。またわが国で著しく普及している小型二輪トラクターの利用体系について，その経費分析を行ない，技術的ならびに

経営上の評価を行なったものである。

このように本論文は，わが国農業の機械化の過程，その方策，ならびにその見通しなどについて論述したものであり，農業機械学に貢献するところが大きい。

よって本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。